

## チンパンジーとボノボから探るヒト社会の成立

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)。シリーズ5「人間とその進化の隣人たち」の4回目が10月22日にあり、京都大学野生動物研究センターの伊谷原一(いだに・げんいち)教授が「チンパンジーとボノボから探るヒト社会の成立」と題して、高い知能を持つチンパンジーとボノボの共通点と違いを、人間社会とも照らし合わせながら語った。



伊谷原一教授。野生のチンパンジーやボノボの研究を専門とし、アフリカでのフィールドワークは27年に及ぶ。同時に、類人猿や熱帯雨林などの保全活動にも熱心に取り組んでいる

有力な手がかりは、チンパンジー特有の、指を丸めた「ナックル歩行」による足跡だ。見つけたら、ひたすら跡をたどる。伊谷教授は動画を交えて地道な研究の一端を明かした。

### ●人間と同じ薬草を利用するチンパンジー

チンパンジーの生態は実に多彩だ。伊谷教授は、①地位の優劣と緊張関係、②道具の使用、③雑食性、④薬草利用、⑤オスによる子殺し、を特徴に挙げた。

オスたちは、集団内での「覇権」を巡ってそれぞれが緊張関係にある。集団を維持するため、上位のチンパンジーに対して下位のチンパンジーがへりくだって機嫌を取ったり、逆に、味方を増やして地位を盤石にするために、上位が下位に対して融和を図ったりすることもあるという。「握手」や「おじぎ」などのしぐさ(挨拶行動)も観察できる。一方、

### ●寝床を探すことから始まる

もとをたどれば、共通の祖先から進化の過程で枝分かれしたチンパンジーとヒト。「我々はどこから来て、どこに行くのか。チンパンジーを研究することがその端緒になります」。伊谷教授は、研究活動の目的をこう語った。

研究の舞台は、アフリカ大陸。スライドには、タンザニア共和国の広大な草原やゾウ、ライオンなどが映し出された。疎開林を4WD車で突き進む映像や、日没後に野生のヒョウが寄り付く宿営地の様子を、20年以上に及ぶ現地での経験をふまえ、こともなげに語った。

研究は、野生のチンパンジーを見つけることから始まる。伊谷教授の流儀はこうだ。原野を歩き、チンパンジーが樹木の上に枝葉で作る寝床を探す。寝床の下の地面で、チンパンジーの新鮮な糞(ふん)が見つかれば、まだ近くにいる証拠だ。さらに

異なる群れ(集団)や外敵には、オスは団結して立ち向かう「一種の軍事的な連帯」が見られるという。

道具の使用も興味深い。細い木の枝をアリ塚に差し込んでアリを釣り上げる「アリ釣り」や、石を使ったナッツ割り、木の枝でハエを追い払う行為など豊富だ。

薬草も利用する。かつてある研究者が、下痢のチンパンジーが植物の葉を丸のみする姿を見た。その後、このチンパンジーは回復したという。研究の結果、この葉は抗生物質の働きを持ち、噛まずに飲み込んだ時にだけ、効力があることがわかった。下痢以外にも虫の駆除や抗菌などに19種類の植物が「薬」として利用されている。その一部は、原地の住民の間でも薬草として服用されているという。

### ●チンパンジーの「子殺し」のナゾに迫る

伊谷教授は、チンパンジー特有の「子殺し」にも言及した。

チンパンジーには、集団内でオトナのオスたちが、同じ集団内の子どもを殺してその肉を食べる事例が観察されている。犠牲になるのは、主に3歳未満のオスだ。

子殺しの持つ意味については、まだ学問的な定説は見いだされていない。伊谷教授は「集団を維持していくうえでの、何らかの意味合いがあるはずです」と推測する。さらに、「いけにえ」など、人間が歩んだ歴史にも触れつつ、「チンパンジーの子殺しは残酷な行為だが、私たち人間も、同様の残酷さを持っています」と指摘した。



現地の住民との食事や助手を雇うやり取りなど、研究の合間のエピソードも興味深かった



葉っぱをくわえたボノボの子ども  
(林原類人猿研究センター・田代靖子さん提供)

### ●ボノボならではの「ホカホカ」とは？

続いて取り上げたのは、コンゴ共和国中央部の熱帯雨林だけで生息が確認されているボノボの生態だ。ボノボは、平均すれば体長80センチ、体重は40キロ。初めて学術書に記載されたのは、1929年と新しい。「最後の類人猿」とも呼ばれている。

ボノボは「ピグミーチンパンジー」という別名をもつ。チンパンジーとの違いは、「オスとメスの社会関係」と「集団間関係」にあるという。それを象徴する行動が、ボノボのメスに特有の「ホカホカ」と呼ばれる、性器をこすりつけあう行為だ。

伊谷教授は「『ホカホカ』は争いごとの後に行われるケースが多く、優劣とは無関係。むしろ、不安なときや緊張したときに感情をほぐすためにしているのではないかと推察した。また、他の動物と異なり、繁殖以外の目的で性行為(交尾)を行うことから、「集団内の社会関係を調節するための機能として、交尾に類した『ホカホカ』などをしているのではないかと分析した。

### ●「母権」のボノボ、「父権」のチンパンジー

チンパンジーは、オスが集団を統率し、少ないオスが2～3倍のメスを集団に抱え込む。一方のボノボは、オスとメスの割合が1対1。しかも、メスたちは年長のメスを中心として連帯し、オスに対しても優位性を示すという。ボノボには「子殺し」は存在せず、成長後も母親に甘えるオスもいる。伊谷教授は「人間社会でいえば、オスはマザコン。メスは、おばちゃんを中心に徒党を組むので、怖くて文句を言えるオスはいません」とたとえ、会場の笑いを誘った。



アフリカ・コンゴ共和国に  
生息しているボノボの子ども  
(伊谷原一教授提供)



講演に聴き入る聴講者たち。高い知能に裏打ちされたチンパンジーやボノボの暮らしぶりに驚きの声があがった。ボノボのメスたちの「気丈」ぶりに、思わず苦笑いする男性聴講者もいた

このような社会的で積極的なメスの存在が、チンパンジーではなし得ない、異なる集団の平和的な共存を可能にしているという。異なる集団間で、メスたちが行き来して橋渡し役となり、「和平」を築くのだ。

伊谷教授は「人間の家族として成り立つための条件を、ボノボはすべて兼ね備えています。人間のような家族やコミュニティーの形成に発展する可能性を秘めているともいえる」と結んだ。

(※原稿及びクレジット未記載の写真は朝日新聞社提供)